

二大結界崩壊による少女分散異変解決物語

星星柿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日幻想の二つの結界、博麗大結界と幻と実体の境界が崩壊した。

それにより幻想郷の少女達は外の世界に場所ごと散らばった。それらを回収し、幻想郷を直すため、霊夢と魔理沙は行く。

※この作品は東方projectの二次創作です。

※時系列的には虹龍洞後です。

※この小説内の世界では彼女達のことには誰も知りません。

目次

一世一代の大異変	1
九代の記憶と幻想の貸本屋店主	3
紅い悪魔の館	6
紅の月下のカリスマが語る衝撃事実	8
現代に現れし破壊魔	10
逆さ城の主	13
アーミー・オブ・フェアリーズ	15
化け狸頭領の幻想帰り	18
美しき春雪景色	20
森に近い蒐集家	23
竹取物語・延長戦	25
騒霊と付喪神ライブ	27
生ける聖人伝説	30
アマゾン川へ近づく彼岸	32
アメリカンドリーマーの真の夢	34
飛行少女を打ち落とせ。	36
幻想の全てを知る半獣	38
番外編 楽園地獄の閻魔	41
木天蓼と猫の総支配者	43
働き者には休息を	45
生命を操作する元無機物	48
三獣大戦	50
地の底の館	53
地上に出た地底の太陽	55

0 / 99 +	57
敗北帰還	59
そして…	62
真相	64
最終回	66
ようやく訪れた平和	

一世一代の大異変

幻想郷にはそれを取り巻く二つの結界、博麗大結界と幻と実体の境界がある。博麗大結界は常識と非常識を隔て、妖怪を守り、幻と実体の境界は外の世界で忘れ去られた、否定されたものを幻想郷に入りやすくし幻想郷を成り立たせる役目がある。しかし、ある日突然、この2つが原因不明の崩壊を起こした。

↓博麗神社↓

時は少し遡り崩壊するおおよそ5分前、霊夢はお茶を啜っていた。

霊夢「平和ねえ。いつまでもこの平和が続くと良いけど。」

閑古鳥が鳴くこの神社は妖怪が多すぎたむろするせいで参拝客が少なく、妖怪もいない日には霊夢はいつも茶を啜るか飯を食うか掃除するか寝るかをしている。

霊夢「そういやもうあのアビリティカードやらはもう使ってる奴見ないわねえ。」

そんな平和なことを思っていた矢先、その時は来た。崩壊だ。

霊夢「あら、急に景色が変わったわ!?というかこの破片は、博麗大結界の一部じゃないの!?!」

慌てる霊夢の前に紫がスキマを開けてやってきた。

紫「霊夢！大異変よ!」

霊夢「わかつてるわよ！崩壊よね!」

紫「そうよ。」

霊夢「急に冷静になっちゃって、こんなになつたらあんたらは大丈夫かしら?」

紫「ええ、応急処置として神には一時的に信仰を増やしてこつちで力と同じ力が出るように、妖怪達にも認知度の境界を弄って同じようにしたわ。」

霊夢「そんなことできるならなんで最初からしないのよ。」

紫「ふふふ、これは最近修行して得たのよ。あとパワーバランスもあるし。」

霊夢「ところで被害は出てるかしら。」

紫「ええ、沢山ね。まず、橙が行方不明、次にあんたが関わってきた能力持ちの子達がほぼ全員外の世界に散らばった、それに伴い紅魔館とか魔法の森とかの場所も結構散らばったわね。おかげでここら辺が平地になったわ。」

霊夢「ほぼということとは、」

紫「ええ、例外もいるわ。確認されてるところだと、私と藍、霊夢に魔理沙ね。あと何故か地底と冥界、畜生界に地獄、彼岸、月で場所は無くてもあんたが関わってきた能力持ちの子達が散ったわ。まあ月は綿月姉妹だけだし、もう豊姫の能力で帰ってるわ。」

霊夢「はあ。」

紫「そこであなたと魔理沙には私がさつき開発した、『幻想郷直行スキマ』を使ってあの子達と場所を戻して欲しいの。」

霊夢「あんたらはなにすんの？」

紫「私たちは2つの結界を何とかして直すわ。」

霊夢「わかったわ。じゃあ、魔理沙をスキマで連れ出して。」

紫「了解。」

紫はスキマに手を突っ込み、魔理沙を取り出した。

魔理沙「うわ紫！これはどう言うことなんだぜ!？」

霊夢「私から説明するわ。」

少女説明中、;

魔理沙「なるほど。わかったんだぜ。私も協力する。」

紫「有り難うね。それじゃあ、言ってるっしやい。」

魔理沙「おう！」

霊夢「頑張るわ。」

—————

く
???

??「不味いわ。どうしようかしら、」

九代の記憶と幻想の貸本屋店主

霊夢「とりあえず移動してみたけど、何処かしらここ？」

魔理沙「というか空飛んで良いのか？ 外の世界は魔法が無いから飛んでる人は居ないんじゃないか？」

霊夢「まあ良いのよ細かいことは。」

二人が飛んでると突然スキマが開いた。

紫「渡し忘れてた物があるわ。はいこれ。外の世界の新聞と世界地図と国の地図、あと外の世界の式神。使い方はこれね。」

霊夢「ううん、読みにくいわね。幻想郷の文字はこっちだともう古い物からかしらね。」

紫「読めないのなら小鈴から探せば良いじゃない。」

霊夢「確かに。場所分かるの？」

紫「分からないわ。」

魔理沙「分からないのかよ！」

紫「だって散らばっちゃったし、」

霊夢「じゃあ世界最大の図書館は知ってるかしら？」

紫「それならアメリカ議会図書館ね。」

霊夢「あら、知ってるのね。」

紫「これでも度々外の世界に行ってるのよ。スキマ繋げる？」

魔理沙「ああ、よろしく頼む。」

紫「そうこなくっちゃ。」

紫は二人の前に二つ目のスキマを開いた。

紫「開けたわよ。」

魔理沙「サンキュ！」

二人は入っていった。

くアメリカ議会図書館く

霊夢「ここが例の世界最大の図書館ね。」

魔理沙「おお！パチュリーの所よりも本あるんじゃないか!？」

霊夢「今回の目的は小鈴ちゃんよ。」

魔理沙「そうだったそうだった。」

霊夢「忘れるんじゃないわよ。」

二人は搜索を始めた。

霊夢「こんなに広いんじゃないや見つけにくいわねえ。」
数時間後

霊夢「ううん、あ、いた！」

魔理沙「やつとか、」

霊夢は目を輝がせながら本を読む小鈴と辺りを見渡している阿求を見つけた。

霊夢「探したわ。」

小鈴「霊夢さんじゃないですか！ここ凄いですね！本が沢山あります！」

阿求「そうね。正直引く程あるわ。気付いたら此処に居たけど案外悪くないわ。」

霊夢「気付いたら？」

小鈴「はい。気付いたらこの図書館に居ました。」

阿求「その時大きな亀裂音が聞こえた気がするわ。もしかすると博麗大結界と幻と現の境界が崩壊してたりして、」

霊夢「そのまさかよ。原因は分からないんだけど崩壊したのよ。それでその時に幻想郷とかの住人がほぼ全て外の世界に散らばったのよ。」

阿求「これは、『幻想郷縁起』にも記すべきね。」

霊夢「そうね。それで最初に小鈴ちゃんを回収しに来ただけ、ちよつと手伝って欲しいのよ。」

小鈴「何をですか？」

霊夢「この外の世界の新聞を解読して欲しいの。」

小鈴「なるほど、良いですよ！」

霊夢「本当!?ありがとう！」

4人の間にスキマが開く。

紫「いたいた。見つかったのね。話しはまとまった？」

霊夢「ええ。」

紫「それじゃあ、送るわね。」

紫は小鈴と阿求をスキマに入れた。

霊夢「私達は？」

紫「貴方達は飛んでかえられるでしょう。それに式神もあるし。それじゃあ。」

紫はスキマで消えた。

魔理沙「くっそ！逃げられた！」

霊夢「しょうがないわね。さ、帰りましょ。」

二人は図書館を去り、飛んでいった。

魔理沙「そういや、なんであの二人があそこに居るって分かったんだ？」

霊夢「勘よ。」

紅い悪魔の館

霊夢達が鈴奈庵を戻し、外の世界の博麗神社に帰ってきた。

魔理沙「さて、次はどうするんだ？」

小鈴「これを解決するなんてどうでしょうか？」

小鈴は手にした新聞の一つの記事を指で指した。

霊夢「何て書いてあるのかしら？」

小鈴「『オーストラリアで謎の赤霧発生 その正体とは？』です。」

魔理沙「赤霧、、、それってもしかして！」

霊夢「あの吸血鬼ね。多分紅魔館の奴らもいるわ。地図は、、、あ、この地図凄い。私達のいる場所と方角が書かれてるわ。」

魔理沙「地図がか？」

霊夢「正確には外の世界の式神なんだけど便利ねえ。オーストラリアの向きは、、、こっちか。それじゃあ行きましよう。」

二人は飛んでいった。

小鈴「行つてらつしやいませ！」

数時間後

霊夢「よし着いたわね。」

魔理沙「ここが『オーストラリア』なのか？」

霊夢「そうよ。」

魔理沙「やっぱりというか、、、紅いな。」

霊夢「紅いわね。前はどうかやって紅魔館探したんだっけ？」

魔理沙「確か勘じゃなかったか？」

霊夢「いや、飛んでいたら美鈴にあって優しく案内してくれたのよ。」

魔理沙「優しく？本当か？」

霊夢「そんなのはどうでも良いのよ。私思ってたんだけど、上から見
て濃くなつてるところに行けば良いと思うのよね。」

魔理沙「確かにそうだな。」

二人は上昇していった。

オーストラリア人「なんだあの飛んでいる人は!？」

く上空く

霊夢「あつた。あそこね。」

魔理沙「やっぱり湖にあるのか?」

霊夢「;;, そうね。この式神で調べた感じ、『マツカイ湖』ていうところらしいわ。」

魔理沙「それじゃ、早速行こうぜ!」

数分後

魔理沙「あつたあつた。早速スキマで戻そうぜ!」

霊夢「いやまだよ。」

魔理沙「なんで?」

霊夢「この霧を第二次紅霧異変を解決してからじゃないと戻しても紅霧だけが残るわ。」

魔理沙「ということはつまり;;,」

霊夢「レミリアに会うわよ。」

??「おやおや誰かと思えばあの時の人間じゃないですか。」

霊夢「あら美鈴じゃない。前回は道案内どうも。」

美鈴「覚悟は出来てるよね?」

霊夢「ええもちろん。」

美鈴「分かつてると思いますがこの霧はお嬢様のです。邪魔をするのなら私も門番としての仕事を全うさせてもらいます。」

霊夢「良いわよ。かかってきなさい。」

????「待ちなさい。」

魔理沙「その声は!」

霊夢「珍しいわね。自分から出るなんて。レミリア。」

レミリア「良いわよ。この霧は戻してあげる。ただ、私に勝てたらね。」

霊夢「どういう風の吹きまわしかしら?」

レミリア「それも貴方が勝ったら教えてあげる。さ、始めましょう

?世界で最も美しい決闘、『弾幕ゴッコ』を!」

紅の月下のカリスマが語る衝撃事実

二人の決闘は激しさを増しているように見える。しかし魔理沙はあることに気がついた。

魔理沙「レミリア手抜いてないか？」

そう、弾幕の量では二人が初めて弾幕ゴッコしたときと同じぐらい多く、派手だが、よく見るとレミリアの弾幕が霊夢を避けていた。

霊夢「あら、やつと私の焦りに気づいたのかしら？」

レミリア「ふふふ、それはどうかしら。」

レミリアはスペルカードも発動させている。それも神罰「幼きデーモンロード」や紅符「スカーレットマイスタ」のような高難易度の物をだ。なのに霊夢は一回も動かずに避けている。

レミリア「これで最後ね。『紅色の幻想郷』」

これもまた、霊夢は動かずに避けきり、霊夢が勝利した。

レミリア「;;、私の負けね。」

魔理沙「どういふことなんだぜ!?!なんで弾幕を霊夢から避けるように撃ってるんだぜ?」

レミリア「弾幕ゴッコは私が久々にスペルカードを撃ちたかったからやっただけ。勝つ気なんてないわ。本題なんだけど、私がこの霧を出した理由はただ一つ、それは;;、」

霊夢「それは？」

レミリア「フランが行方不明になったからその捜索のためよ。もう咲夜がこの土地全体を探したけど居なかったから戻すわ。」

紅霧が消える。

霊夢「フランが行方不明って!？」

魔理沙「あんな情緒不安定破壊魔を放してたら太陽を破壊するかもしれないだろ!？」

レミリア「そうね;;、早く探しに行きましょう。」

霊夢「紅魔館は幻想郷に戻す？」

レミリア「ええ。お願い。」

霊夢は紅魔館とレミリアをスキマに入れた。

霊夢「早く戻るわよ！」

2人は高速で飛んでいった。

（外の博麗神社）

霊夢「小鈴ちゃん！新聞の中から破壊に関する記事を取り上げてる新聞探して！」

小鈴「そんなに慌ててどうしたんですか？」

魔理沙「理由は後で話す！」

小鈴「は、はあ、；、；」

小鈴は多くの新聞の中から一つの新聞を取り出した。

『東京都内の駐車場で原因不明の車の破壊事件発生。そのわけとは？』

霊夢「これね！」

魔理沙「よし、それじゃあ行こうぜ！」

霊夢「ちよつと待ちなさい。」

魔理沙「またか！」

霊夢「念には念をよ。紫、ちよつと来てくれない？」

紫「どうしたのよ。」

霊夢「あれを起こすわよ。」

魔・紫「あれ？」

霊夢「私とあんたでやるものと言ったらあれしかないじゃない。『永夜異変』よ。」

紫「懐かしいわね。」

魔理沙「おいおい巫女が異変を起こすなよ。まあでも太陽を破壊されないためか。なら仕方ない。」

紫「じゃあやるわよ。」

紫が指パツチンするの夜になった。

霊夢「前回そんな音出したっけ？」

紫「演出よ。」

霊夢「まあそれは置いといて、それじゃ、行ってくるわ。」
2人は飛んでいった。

現代に現れし破壊魔

また一つ、車が爆発した。

フラン「きやははは!!楽しい楽しい!こんな楽しいこと久しぶり!しばらく地下で引きこもってて最近の楽しいことといえればあの黒い液体のとき以来ね!きやははは!私のために月も太陽のかわりに昇ってるし。ああ、おかしくなっちゃいそう!」

霊夢「ここが東京ね。」

魔理沙「それにしても広いなあ!」

霊夢「この中からたった一人の少女を探すのよ。」

魔理沙「辛いな。」

二人は手分けして探し始めた。一方、その頃のとあるSNSでの書き込み。

『俺の車壊れてるんだが、しかも新車。』

『最近車の破壊が横行してるようですね。しかも一ヶ所に集中して握られたかのように。』

『速報!警察庁が先ほど車破壊に関する情報提供で提供金を渡すと発表!』

まさかこの書き込みでる人たちはたった一人のしかも吸血鬼が犯人だとは思わないだろう。

『なんか急に外暗くなった?』

『まだ3時やぞ?!なんで暗いんや?』

第二次永夜異変に関する書き込みも多くなった。そろそろ霊夢達に戻ろう。

霊夢「居た?」

魔理沙「いや、」

霊夢「全くあいつはどこ行ったんだ、」

そのとき遠くから爆発音がした。

霊夢「あつちからよ。急ぎましょう！」

魔理沙「おい待てよ！」

2人は音源の方へ向かった。

「??? 駐車場」

霊夢「居たわ。」

魔理沙「本当だ。」

二人はフランを見つけた。

フラン「あら、あなた達はあの時の人間じゃない。」

霊夢「あんたを幻想郷に戻すためにここに来たの。大人しく帰りなさい！」

フラン「別に良いんだけど、私のプライドがなあ、；；、弾幕ゴツコで私に勝てたら良いわよ。」

霊夢「臨むところよ！」

二人は弾幕を展開した。

通行人「うおお、すげえ、何あれ？」

ランナー「なんだありや!？」

魔理沙「なんであいつらは外の人間の目のつく場所でやるのかな、；、」

二人の争いは激しく、そして美しくなっていた。

女性「幻想的、；、」

知識人「人が機械無しで飛んでいるだど!？」

それに伴い、観客の数も増えていった。そして、

フラン「ぐっ！」

フランが撃墜された

霊夢「キャッチ！」

すかさず霊夢がスキマに持ちかえ、フランを戻した。

霊夢「よし！異変解決つと。さ、戻るわよ。」

魔理沙「お、おう。」

二人は帰っていった。

その日のニュースの一部

キャスター「今日の3時頃、急に夜のようになるという怪奇現象が

起こりました。また、それは東京都内の???駐車で二人の少女の喧嘩が終わり、しばらくして急速に太陽が昇ることで終わりました。」

逆さ城の主

帰ってくる途中、浮かんでる城を二人は見つけた。

魔理沙「これって、」

霊夢「輝針城ね。」

二人が話しているとき、一機のヘリコプターが飛んできた。

キヤスター「???テレビの者ですが、この城は何ですか!?あと貴方達は何故浮いているんですか!?!」

霊夢「変なのが来たわ。」

魔理沙「撃ち落とすか?」

霊夢「いや、良いわ。」

霊夢が手を叩き、輝針城と二人を囲む結界を張った。

霊夢「これで良いわ。でも一時的なものだから急ぎましょう。」

魔理沙「わかったぜ。」

二人は輝針城に入ってしまった。

魔理沙「そーいやさ、ここの針名丸ってお前の神社の虫籠に居なかつたか?」

霊夢「ああもうこっちに戻ってるわよ。」

魔理沙「始めて知ったぜ。」

二人が飛んでると何かに魔理沙がぶつかった。

針名丸「痛!誰だ!」

霊夢「あ、そこにいたのね。」

針名丸「小さいからって馬鹿にして!」

魔理沙「まあまあ、ところで正邪は?」

針名丸「なんかどっか行ったわ。『こっちの世界で下克上果たしてやる!』とか言つて。全く、懲りないわねえ。でも打出の小槌無いのにどうするんだろう?」

魔理沙「さあな。」

霊夢「ところでこの城って幻想郷に戻しても良いかしら?」

針名丸「構わないよ。正邪が戻ってこなくて心配だけど。」

魔理沙「良かったな霊夢、面倒なことにならなくて。」

霊夢「そうね。それじゃ、早いところスキマに通しましょう。」

2人は城の外に出て、輝針城をスキマで幻想郷に戻した。

霊夢「ふう、ついでは言え主要箇所の一つと厄介者情報を取れて良かった。」

魔理沙「それもそうだけどさ、あの飛んでるやつどうする?」

霊夢「ううん、; ;、しぶといわねえ。もう飛んであれが追いつけないぐらいのスピードで逃げましょう。」

魔理沙「そうだな!」

霊夢が結界を解除したのと同時に二人は目にも止まらぬスピードで飛び出した。

キヤスター「あ、待ってください!」

ヘリコプターは追いつけなかった。

小鈴「あ、お帰りなさい!」

霊夢「疲れたわ。」

小鈴「どうでしたか?」

魔理沙「目的の人物とついでに主要箇所を戻してきたぜ!」

小鈴「戻す?」

霊夢「ああ、言つてなかったわね。私達は散らばった幻想郷の住人と建物を幻想郷に戻してるのよ。」

小鈴「大仕事じゃないですか!頑張ってください!」

霊夢「ありがとう。」

小鈴「あとこれ見てください!霊夢さん達が写ってますよ!」

小鈴が見せた新聞には霊夢とフランが戦ってる様子が写っていた。

魔理沙「目立ったからだな。」

霊夢「そうね。気を付けましょ。」

アーミー・オブ・フェアリーズ

紫「霊夢。」

霊夢「うわビックリした！いきなりスキマから何よ？新聞？」

霊夢は新聞を受け取り、読み始めた。

霊夢「何々？『妖精軍結成。妖精は実在したのか？』」

魔理沙「妖精ってまさか、」

新聞『本日15時頃、防衛省は「自衛隊員に妖精を加える。」と発表しました。』

その文の下にはクラウンピース、ルナチャイルド、スターサファイア、サニーミルク、チルノの写真が載っていた。

霊夢「あいつら捕まったのね、」

魔理沙「リリーとかラルバとかはどうなんだ？」

紫「まあ、他と比べて、ねえ。」

魔理沙「？」

霊夢「まあ、とりあえず向かきましょう。」

魔理沙「あいつらはどこにいるんだぜ？」

霊夢『『防衛省』でところらしいわ。式神もあるし。行きましょう。』

二人は飛び出した。

小鈴「、、私の仕事が、、」

紫「ああごめんなさい。仕事取っちゃった。」

数分後

霊夢「ここら辺、、のはずなんだけど、、」

魔理沙「居なくね？」

霊夢「おかしいわねえ、、」

すると突然、霊夢は細かい弾幕が当たった感覚がした。

霊夢「弾幕!？」

魔理沙「どこからなんだ!？」

魔理沙には大きい弾幕が当たった。

霊夢「これはチルノね。」

魔理沙「私のはクラウンピースだ!」

霊夢「で、ルナチャイルドとサニーミルクの能力で宣言の音と弾幕を隠してるのね。」

魔理沙「どうやって探すんだ？」

霊夢「そんなの簡単よ。おおがまが出たぞー！」

魔理沙「おいおい、そんなので出るわけないだろ。」

スターサファイア「おおがまたつて！」

サニーミルク「逃げろー！」

三妖精は逃げてつた。

魔理沙「出た。」

霊夢「魔理沙、追ってつて。」

魔理沙「あいよ。」

魔理沙はスキマを受け取り、箒で高速で飛んでいった。

クラウンピース「3人とも逃げちやつた。」

チルノ「あたいらでやれば良いじゃん！」

クラウンピース「それもそうだね。」

霊夢「あら、私とやるの？2対1で？」

チルノ「うん！行くよ！」

クラチル「凍獄『八寒地獄』」

八色の弾幕がそれぞれ別の動きをしながら霊夢に向かった。

霊夢「合同技ねえ。生憎私は急いでるの。『夢想天生』」

クラチル「何そのスペルカード？」

霊夢「あら初めてだっけ？あんたらに見せるの。」

霊夢はクラチルの大量の弾幕に当たったが避けた。二人にはそう

見えた。

チルノ「今当たったよ！」

霊夢「残念ね。これは無敵なの。」

二人は霊夢の弾幕に当たり、墜落した。

魔理沙「あらよつと。」

霊夢「ナイスキャッチ。」

魔理沙はスキマを返した。

魔理沙「帰ろうぜ！」

霊夢「そうね。」

二人は帰っていった。

SNSの反応

『妖精かわEEEE!』

『良いよなあ、上の人は。』

『速報!車破壊の犯人と戦った巫女また現れる!』

『なんか私の家の上で3つの箒星が飛んでたんだが。私死ぬのかな。』

『#巫女の情報求む』

『彗星飛んでたから撮ってみて、じっくりみたら4つとも人の形してた。』

化け狸頭領の幻想帰り

前回の終了から時は少し遡り3日前の崩壊異変直後。

????? 「おや、ここはどこかの?」

尻尾と耳を生やし、メガネをかけた二ツ岩マミゾウは、突然視界が変わりライオンの口から水が出てる像が見えた。

マミゾウ「確かこれは、マライオンじゃったな。ということはこちらはシンガポールじゃ。儂は外の世界におるのか。久しぶりじやのう。まあここで道草を食うのも良いのじやが、あそこに帰らないといけないのう。」

マミゾウは空を飛び始め、外の博麗神社に向かった。

マミゾウ「最後にこつちにきたのはいつだったかのう。ああ、あの時じや。女学生との戦いの時じや。それにしてもあの時から大分発展してるのう。あれから何年ぐらい経ったかの。」

マミゾウが外の世界を眺めると、感じ慣れた気配を感じた。

マミゾウ「この気配はぬえではないか?」

マミゾウが気配の元を見る。

マミゾウ「やはり、ぬえではないか!」

ぬえ「お、マミゾウじゃないか! 貴方もこつちに来てたのね。何してるの?」

マミゾウ「何故か外の世界に飛ばされたから幻想郷に戻ろうと思ってるの。お前さんはどうして?」

ぬえ「私も気づいたら外にいたからとりあえず人を怖がらせようとおもって正体不明の種をばらまいていたのよ。まあ十分怖がらせたし、私も帰ろうかな。」

マミゾウ「じゃあ儂と行くか? どうせ霊夢殿がこの異変を解決しているだろう。少しでも霊夢殿の機嫌でも取ろうじやないか。」

ぬえ「それもそうね。ただもう少し外の世界を見たいからゆっくり行こ!」

マミゾウ「それもそうじやな。」

2 妖は一緒に飛び始め、風景を楽しみながら話したり、追ってきた

機械を墜落させたりして外の世界を楽しんだ。

3日後

ぬえ「ふう着いたわあ！」

マミゾウ「さて霊夢殿はどこかの？」

マミゾウは辺りを見渡した。

マミゾウ「お、あいつは。」

マミゾウは見つけた人の元に向かった。

マミゾウ「おーい、小鈴殿。」

小鈴「マミゾウさんに、誰ですか？」

マミゾウ「僕の友達じゃ。それより霊夢殿と魔理沙殿はどうしたのじゃ？」

小鈴「今東京に行ってます。」

会話しているとタイミング良く2人が帰ってきた。

魔理沙「お、マミゾウにぬえじゃないか！」

霊夢「お、自ら来るなんて良い心構えね。」

ぬえ「まあ私も幻想郷は好きだからね。」

僕「僕も同感じゃ。」

霊夢「それじゃあ帰すわよ。」

霊夢は2妖をスキマに通し、幻想郷に帰した。

霊夢「ありがたいわあ、ああやって来てくれると。他のも見習ってほしいわ。さて、次は誰かしらね。」

美しき春雪景色

二人が小鈴の話聞きながら、次の目標を決めていると、雪が降ってきた。今の季節は桜が咲き乱れている季節だというのに。

霊夢「こんな景色、前にも見たわね。」

魔理沙「そうだな。」

霊夢「犯人は知ってるよね？」

魔理沙「ああ。」

魔理沙は上空にマスタースパークを放った。数秒し、何か落ちてきた。

霊夢「何してるのよ。妖夢。」

妖夢「痛たたた、何するんですか！」

魔理沙「質問の答えになってないな。」

妖夢「、、幽々子様に頼まれたんですよ。『春度を集めてくるように。』て。」

霊夢「あんたらの本拠地は何処よ。」

妖怪「札幌県です。」

魔理沙「何でまた春度を、、」

妖夢「あいつが暴れてるんです。」

霊夢「あいつって？」

妖夢「レティ・ホワイトロックです。あいつが北海道全域に猛吹雪を発生させてるんです。最近の北海道は寒気があるみたいで、、」

魔理沙「それで春度をぶつけて、レティの活動を鈍らせるのか！」

妖夢「そうです。」

霊夢「なるほどね、、わかったわ。私も協力するわ。終わったら白玉楼を冥界に戻すけど。」

妖夢「はい！お願いします！」

霊夢「それじゃあ向かいましょう。」

3人妖は出掛けた。

〜1時間後〜

霊夢「着いたわね。」

魔理沙「寒っ！本当に吹雪だぜ。凍ちまうぜ！」

妖夢「それじゃあ、春度をぶつけます！」

妖夢は回収した春度を全てぶつけた。するとたちまち吹雪は収まり、空に一つの人影が見えた。

妖夢「あいつがレテイ・ホワイトロックです！」

霊夢「捕まえてくる！」

霊夢は全速力で飛び、レテイの元に辿り着いた。

霊夢「うおりやあ！」

レテイ「ぐぎやあ！」

レテイは何故か悲鳴を上げ、幻想郷に戻った。

霊夢「よし、次は白玉楼ね。春度、戻しておきなさいよ！」

妖夢「分かってますよ！案内します。」

妖夢は白玉楼まで案内する途中で春度を回収していた。

〜10分後〜

霊夢「相変わらずだだっ広いわねえ。何故か観覧者も多いし。ま、良いわ。取り敢えず主人に会いましょう。」

妖夢「わかりました。」

魔理沙「なんか久々な気がするぜ。」

二人は妖夢に案内されたところに行った。

幽々子「あら妖夢、吹雪収まったわね。お疲れさま。」

妖夢「いえいえ。」

霊夢「白玉楼を幻想郷に戻すけど良いかしら？」

幽々子「全然構わないわ。」

霊夢「それじゃ、お構い無く。」

霊夢は白玉楼を戻した。そのとき観覧者はざわめいた。

魔理沙「五月蠅いな。」

霊夢「五月蠅いわね。早く帰りましょう。」

二人は飛んでいった。

SNSの反応

『話題の観光名所行ったら名所を巫女が持っていたんだが！』

『巫女の情報をまとめてみた。』

- ・ 場所や人を消すことができる。
- ・ 飛ぶことができる。
- ・ 突然現れ始めた人や建物に関係ありそう。』

森に近い蒐集家

霊夢と魔理沙が飛んでる途中のこと。

霊夢「ねえ魔理沙。」

魔理沙「なんだ？」

霊夢「あれって霖之助さんのお店じゃない？」

魔理沙「おいおい、こんなへんぴな所にあるわけ、てあるな。へんぴな所にあるな。」

霊夢「取り敢えず行きましょ。」

2人は香霖堂へ向かった。

魔理沙「外の世界に來ても相変わらず変なものが多いな。」

霊夢「そうね。片付けとかしないのかしらね。ま、いいわ。取り敢えず入りましょ。」

カランコロン

霖之助「いらっしやい、て霊夢達か。どうしたんだい？」

霊夢「霖之助さんも知ってるよね。外の世界に來たこと。」

霖之助「もちろん知ってるさ。丁度良い。僕が外の世界で集めたものを見るかい？」

魔理沙「お、いいな。」

霖之助「集めたというか買ったものだが、まずはこれだ。」

霖之助は左右が赤と青の謎の黒い物を出した。

霖之助「これは”M i n t e n d o L E V E R”というものだ。

使い道はこれでどうやら『ゲーム』というもので遊ぶらしい。」

霊夢「こんなので遊べるの？」

霖之助「僕が言ってるんだ。」

魔理沙「使用法は？」

霖之助「不明。」

魔理沙「香霖の能力の駄目なところはそこなんだよなあ、」

霊夢「そんなことは良くて、他には何かあるのかしら？」

霖之助「これとかはどうだい？」

今度は小さい正方形の内の繋がった2辺の形をした物を出した。

魔理沙「変な形だな。」

霖之助「これは”水鉄砲”というもので、水を発射するらしい。」

霊夢「これは使用方法はわかりやすいわね。」

魔理沙「そうなのか？」

霊夢「ええ。その蓋を外してから穴から水を入れて、左下のボタンを押すんじゃないかしら？」

霖之助が実際にやってみると、本当に出来た。

霖之助「おお、こうやって使うのか。」

魔理沙「よくわかったな。」

霊夢「勘よ。」

霖之助「それじゃあ最後にこれだ。」

霖之助は4枚の羽の付いた物を取り出した。

魔理沙「これまた変な形だな。これは何て言う名前なんで用途はなんだ？」

霖之助”ドローン”と言って飛ばして遠く離れた景色を撮影したり出来るものらしい。飛ばすことには成功したんだけど撮影が判らない。」

霊夢「うーん、よく判らないわね。」

魔理沙「そうだなよく判らない。」

霖之助「まあこんなところだ。」

霊夢「じゃあ用事を言うわよ。幻想郷に帰るかしら？」

霖之助「まあ帰ろうか。もうこっちには飽きてきたし。」

霊夢「わかったわ。」

霊夢は外に出てスキマで香霖堂を戻した。

霊夢「さて、帰りましょ。」

魔理沙「そうだな！」

2人は再び飛んだ。

竹取物語・延長戦

霊夢たちが帰り、新聞で情報収集しようとしたとき、近くで不死鳥が見えた。

魔理沙「霊夢！見たか今の！」

霊夢「ええ。どうせあの2人よ。」

小鈴「あの2人ってなんですか？」

魔理沙「少し仲の悪いライバル同士みたいな感じの奴らだ。」

霊夢「まあ取り敢えず行きましょ。」

魔理沙「；；、どこにあるんだ。永遠亭は。」

霊夢「帰り途中で竹林があつたからそこよ。もしかするとあそこが迷いの竹林かもしれないわ。」

魔理沙「そうか。それじゃ、出発だ！」

↳数分後↳

霊夢「ここよ。」

魔理沙「ふむ；；、こりや迷いの竹林だな。丸々移つてる。まあ魔法の森も被害にあつてるから竹林もあうよな。」

霊夢「そうよねえ；；、まあとりあえずあいつらを止めないと。」

霊夢と魔理沙は竹林へと入った。

↳迷いの竹林↳

霊夢「こちら辺にあるはずだけど；；、あ、あつたわ。」

魔理沙「バツチバチにやつてるな。」

霊夢「まあ少し観戦してましょ。」

二人は観戦に入った。

輝夜「ふふ、腕が落ちたかしら？それとも久しぶりの外の世界で浮かれてるのかしら？」

妹紅「ははは！そつちもじゃないか!？」

2人はお互いのことを罵りあいながら殺し合いしていた。

鈴仙「お師匠様。何故今、輝夜様は妹紅と殺し合いしているのですか？」

永琳「それは、輝夜が妹紅に靴の左右を入れ換える悪戯をしたから

よ。」

鈴仙「なにをやってるんですか？」

永琳「さあ？」

輝夜「別に良いじゃない！あれぐらい！」

妹紅「いいや、あれで私は転んで、筍を取るために持ってた鎌とかを上に放り投げ、それが首を切ったんだぞ！」

輝夜「そんなになるって思わないわよ！」

妹紅「そんなことはどうでも良い！とにかく一回殺させろ！」

輝夜「嫌なこった！」

2人の殺し合いは激しさを増した。

輝夜「く、なかなかやるわね！」

妹紅「これで、終わりだ!!」

妹紅は輝夜に止めを刺した。そして、暫くし、輝夜は復活した。

輝夜「あーあ。今日は負けちゃったわ。」

妹紅「反省しやがれ！」

永琳「姫様。あちらにお客様です。」

輝夜「ええ。わかってるわ。」

輝夜は霊夢達の方に歩き出した。

霊夢「終わったようね。」

魔理沙「輝夜が近づいてきてるしな。」

輝夜「待たせたわね。どうしたかしら？」

霊夢「あんたらと竹林を幻想郷に戻したいんだけど。」

輝夜「あら、してくれるの？それじゃあお願いね。」

霊夢「了解よ。」

霊夢と魔理沙は高く飛び上がり、スキマを大きくし、竹林を幻想郷に戻した。

霊夢「これで完了。」

魔理沙「帰ろうぜ！」

騒霊と付喪神ライブ

霊夢「小鈴ちゃん？」

小鈴「あ、はい！ええつと、これとかどうでしょうか？」

魔理沙「何を教えてんだが。」

霊夢「勝手に覚えたのよ。」

霊夢は新聞を受け取り、内容を読んだ。

新聞『謎の美女演奏集団!?!その正体は!?!』

下の写真には、赤いドラマー、黒いヴァイオリニスト、紫のトランペット奏者、赤いキーボード奏者、黄色い琵琶奏者、白い琴奏者の写真が貼られていた。

霊夢「これって、」

魔理沙「プリズムリバーwithHと九十九姉妹じゃないか！」

小鈴「夢のコラボですね！」

霊夢「こつちとしては傍迷惑よ。場所は、東京都東京駅前よ。」

霊夢はスマホで東京駅について調べた。

霊夢「もう始まつてるわ！急いで行くわよ！」

魔理沙「お、おい待てよ！」

2人は全速力で飛んでいった。

数分後

霊夢「ここが東京駅ね、」

魔理沙「おい、あそこ！人が集まつてるぞ！」

霊夢「本当ね！あそこら辺にいるはずだわ！探しましょう！」

二人が着地した瞬間、音が聞こえてきた。演奏だ。

霊夢「あっちよ！」

霊夢は少し人より飛び、演奏会場へと向かった。

霊夢「もうすぐね。」

アナウンスが鳴り響く。

雷鼓「最後はルナサのソロ『幽霊楽団』 Phantom Ensembleだ！最後まで付き合ってくれよな！」

やけに興奮気味の雷鼓のセリフでルナサが演奏し出した。ヴァイ

オリンアレンジは演奏を聞く者の心を落ち着かせ、少しずつ心の水底へと沈ませていった。

霊夢「始まつちやったわ！」

魔理沙「スペカ撃つか!？」

霊夢「いや良いわ。このお札でなんとかか、」

その時、太鼓が飛んできた。

霊夢「危ないわねえ、、、どうせあの付喪神ね。良い度胸ね!私が退治してあげるわ！」

そういつてスピードは上がった。そろそろ曲が終わる頃だ。あと10秒

霊夢「あと少しで完全に鬱になっちゃうわ！」

9

霊夢「間に合え！」

8・7・6・5・4・3・2

霊夢「うおお！」

1

霊夢「うおい！」

霊夢はスキマでルナサを帰し、そのままプリズムリバーと九十九を帰した。

霊夢「あとはあんただけだけど、なんであんな奴にソロをやらせたのよ。」

雷鼓「外の世界の人は皆暗いわ。だからその気持ちを上げさせようと思つてね。」

霊夢「いらないお世話よ。」

霊夢はスキマで雷鼓を帰した。

霊夢「ふう、仕舞い終わった、、、」

魔理沙「危なかつたぜ。」

二人は帰つていった。

SNSの反応

『巫女がライブ途中でソロマンを消したんだが!』

『また出たか、、、あの巫女は何なんだ!』

『そういや最近山奥の廃神社で気配を感じる』』

生ける聖人伝説

例の如く帰宅途中。

霊夢「あ、ちよつと寄り道させて。」

魔理沙「お、どうしたんだ？」

霊夢「ちよつと『法隆寺』に寄りたいのよ。」

魔理沙「馬鹿か！ここからあそこまですごい遠いぞ。」

霊夢「分かっているわよ。ちよつと1人だけあそこに居そうなのよ。」

魔理沙「分かっている。分かっているんだけどな！」

霊夢「じゃあさっさと行きましょ。」

魔理沙「もう分かったぜ！」

2人はスピードを上げ、奈良県へと向かった。

く30分後く

霊夢「ええと、ここが法隆寺かしら？」

魔理沙「多分そうだろ。”あいつ”から聞いた特徴がちやんとある。」

霊夢「まあそうですね。そうだと信じましょ。」

2人は着地した。

魔理沙「ここが法隆寺なら”あいつ”いる筈。」

2人はそこら辺を探し始めた。

く5分後く

霊夢「いた！」

霊夢が突然叫んだ。

魔理沙「あ、本当だ。」

ヘッドホンを着け、特徴的な髪型でマントを着けた、『豊聡耳神子』である。

神子「どうしたのだ。そんなに叫んで。虫でもいたのか？」

霊夢「あんたを探してたのよ！」

神子「この私をか？」

霊夢「あなたを幻想郷に帰すためにね！」

神子「帰してくれるのは有り難い。だが、一回こっちでスペルカー

ドを撃ちたい。」

魔理沙「じゃあ私が避けるぜ。」

霊夢「じゃ、頼むわ。」

神子「では行くぞ！『生まれたての神霊』！」

神子の方から紫の弾幕が降ってきた。

魔理沙「うおっと！よりによってそれかよ！」

魔理沙は難は少しありながらも避けつつ、被弾させていった。

神子「おお！さすがは一度避けきってみせただけあるな！」

魔理沙「ははは！どんなもんだぜ！」

紫弾が全て白くなり、魔理沙の元へ向かった。降ってくる弾幕が青へと変わった。

魔理沙「ラストスパートだぜ！」

魔理沙はどんどん神子の被弾数を上げていった。そして、被弾数が一定数を越えた。

神子「やはり強い。霊夢は桁違いだが魔理沙も相当だ。」

霊夢「それじゃ、帰すわよ。」

神子「ああ。よろしく頼む。」

霊夢はスキマで神子を帰した。その時。

キャスター「〇〇ニュースの者です！あなた方は一体何者ですか！？」

霊夢「あ？」

魔理沙「私の名前は霧雨魔理沙！普通の魔法使いだ！」

霊夢「ちよつと何普通に名乗ってるのよ！目立たないようになつて言われてるでしょ！さっさと逃げるわよ！（小声）」

魔理沙「ちよつと待てよ！」

2人は飛んでいった。

キャスター「、、、私たちはあの2人を引き続き追っていきます！」
視聴者へと言った。

SNSの反応

『お、ついに魔法使いの方の名前が分かったか。』

『目立つちゃだめなのか。余計何者か気になるな。』

アマゾン川へ近づく彼岸

霊夢「いやー、災難だったわ。」

マミゾウ「ご苦労ご苦労。」

魔理沙「なんでお前がここに居るんだぜ？」

マミゾウ「まあなんだ、ちよつと助言をしようと思つての。」

霊夢「何よ。」

マミゾウ『ブラジル』という国あたりに大きな川がおる。そこに三途の川の連中がおるのではないか？」

霊夢「なんでそう言えるのよ。」

マミゾウ「分散先はその人に関係のある場所だと睨んでおる。小鈴だつたり紅魔館が良い例じゃ。」

霊夢「はあ；；、しようがない。言ってみましょう。」

魔理沙「ちよ、待てよ！」

霊夢の後に遅れて魔理沙も飛び出した。

小鈴「あれ？マミゾウさん？」

マミゾウ「小鈴か。」

霊夢「結構距離あるわね！」

魔理沙「地図では今どこだ？」

霊夢「後；；、1分位よ！」

魔理沙「分かつたぜ！」

～1分後～

霊夢「ここよ！」

魔理沙「でかくねえか？」

??「誰か；；！助けておくれ；；！」

霊夢「あそこからよ！」

2人は急降下した。

霊夢「いたわ！小町に映季、あと；；、えーと；；、」

魔理沙「櫻花に潤美だ！忘れるな！」

霊夢「そうそうその2人。」

小町「そんなことより鰐に教われてるんだ！」

魔理沙「火力で押しきるぜ！恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙は鰐にマスタースパークを命中させ、鰐は沈んでいった。しかしその結果鰐が出血し、大量のピラニアが船を襲った。

瓔花「うわー！魚が襲ってくる！」

潤美「魚なら渡しに任せな！」

潤美は何処からか網を取り出し振り回した。ピラニアが何匹か入った。が、結果は襲ってくる数が増えただけだった。

映季「さらに悪化させてどうするのですか！」

潤美「すみません！」

霊夢「あんたの能力で一回魚を重くすれば良いじゃない。もうそんなに居たら身近よ。」

潤美「やってみるかね。」

潤美が能力を使うと魚は沈んだ。

霊夢「引き上げるわよ！」

2人は船を陸に上げた。

霊夢「1つ聞いて良いかしら？ここに来たときはどんな感じだった？」

映季「私がいつも通り裁判をしてたら急に小町の船に乗っておりそれで。」

小町「私もさびび、働いてたら急に。」

潤花「私も。」

霊夢「なるほどねえ。取り敢えず帰すわよ。」

霊夢は4妖を帰した。

魔理沙「ううむ、原因は何だろうな。」

霊夢「さあね。でもあの狸が言ってたことも踏まえると、」

魔理沙「珍しいな。お前が妖怪の意見を考えるなんて。」

霊夢「たまにはね。ううん、やっぱり崩壊は誰かが意図的にしたのか、」

魔理沙「そんな力持つてる奴なんかいるか？」

霊夢「分からない。」

2人はそう言いながら飛び出した。

アメリカンドリーマー〜真の夢〜

霊夢 「魔理沙。来たに向かうわよ。」

魔理沙 「何でだ？」

霊夢 「『アメリカ』ていう所がとてつもなく大きいだよ。」

魔理沙 「それが？ 『大きいから誰かしらは居るだろう』という事か？」

霊夢 「そういうことよ。」

魔理沙 「あのなあ；、ま、行ってみねえと分からねえか。」

霊夢 「そうよ。」

二人は北へと方向を変えた。

　　〜アメリカ　アリゾナ州〜

霊夢達はアメリカに着いた。着いたは良いものの、見える人々は全員”寝ていた”。

霊夢 「外の世界つて変ね。」

魔理沙 「そうだな。昼寝の習慣なんかが有るなんてな。」

霊夢 「犯人は誰でしょうね。」

魔理沙 「どうせあいつだろ。」

霊夢達はもう少し北上した。

　　〜モンタナ州〜

もう少し北上した先では寝ている人は居なかった。

霊夢 「まだここには来てないのね。あいつ。」

魔理沙 「ま、ちよつと待ってようぜ。」

二人は飛びながら監視した。通り行く人の中には二人の様子を撮影する者も居たが；、

　　〜監視ししてからおよそ10分後〜

向こうから何かが飛んできた。

霊夢 「遂に来たわよ。」

そして後100mのところ；、

魔理沙 「そこ止まれ！妖怪獺の『ドレミー・スイート』！」

何か；、ドレミーは止まり、二人の方を向いた。

ドレミー「貴方はいつぞやの巫女と魔法使いではありませんか。どうされましたか？」

霊夢「どうしたもなにも、あんた何やってんのよ？」

ドレミー「眠らせてるんです。突然夢の世界から現実に出されてしまったためそこら中の人に夢を創る、つまり眠らせることでそこを通じて夢の世界に帰ろうと思っただけです。」

霊夢「私が帰すから心配しないで頂戴。」

ドレミー「助かります。」

霊夢はドレミーをスキマを通じ、夢の世界に帰した。

魔理沙「というかそれ、幻想郷に行くんじゃないか？」

紫「安心して頂戴。渡したときはそう言ったけど、実は戻した子のもと居た場所に戻す機能もあるわ。」

霊夢「なら安心ね。つて！いつのまに居たのよ。」

紫「さつきから」

魔理沙「ま、こいつは放っておいて、帰ろうぜ。」

霊夢「そうね。」

二人は飛びだった。

しばらく飛んでいたとき、突然謎のミサイルが直撃した。しかし、二人は無事だった。

霊夢「危ないわねえ、；；結界と『夢想天生』発動させたから無事だったけど、；；」

魔理沙「ありがとな霊夢。」

霊夢「どういたしましたして。さて、今の飛行物体は何処から飛んできたのかしら？」

魔理沙「あそこじゃないか？」

魔理沙が指を指した先には謎の建物があった。

霊夢「あそこに『マスタースパーク』よ！」

魔理沙「了解！」

魔理沙は叫んだ。

魔理沙「恋符『マスタースパーク』！」

飛行少女を打ち落とせ。

くミサイル基地く

未知の飛行物体がレーザーに写る。

軍人「未知の飛行物体を発見。命令を求む。」

司令官「様子を見ろ。」

軍人「偵察ドローンを飛ばす。」

司令官「了解。」

軍人は手元の操作盤を使い5台程のドローンを飛ばした。

偵察の結果は驚きの結果が取れた。何故かアメリカ中（一部州以外）の人々が寝ていた。そして、例の飛行物体^{；；}ではなく飛行少女と1人の少女が話し合い、その少女を飛行少女が消した。恐らくは飛行少女は人ではなく何処かの国の生物兵器だろう。

軍人「対象を兵器と推測する。命令を求む。」

司令官「打ち落とせ。対空ミサイルでだ。」

軍人「了解。」

軍人は飛行少女をギリギリまで引き寄せ、ミサイルを発射した。ミサイルは見事命中した。しかし、少女から満月の弧を描くように球体が出現し、その球体から半月状の四角い物体が出現後、ミサイルを破壊していった。

軍人「命令失敗！」

司令官「何!?!」

軍人「2人目の飛行少女からレーザーが^{；；}」

その時、レーザーが体を貫いた。しかし、死ぬ程ではなく、少し熱いぐらいだった。

軍人「な、なんだったんだ。」

司令官「本部へ連絡しろ！今すぐ！」

軍人「繋がります！」

軍人はアメリカ軍の本基地へ電話を繋げた。

司令官「連絡する！生物兵器を発見！開発国は不明！返信を求めろ。」

電話先「了解。特徴を伝えよ。」

司令官「対象は人型。生物を消去、ミサイルの無効化、レーザーをする。撃退の際には気を付けよ。」

電話先「ラジャー。」

電話が切れた。

軍人「なんだったのだろうか。あれは。」

司令官「さあ。」

2人は基地の奥へと行った。

く外の博麗神社く

霊夢「ううむ、あの爆撃は危なかったわねえ。」

紫「そうね。」

霊夢「あら居たの。」

紫「まあね。目立ったことは少ししようがない面があるわ。」

魔理沙「そうだぜ！」

紫「まあ咄嗟に結界の展開と『夢想転生』の発動は流石ね。これからはもつと大変になるわよ。気を付けなさい。」

霊夢「わかったわ。ところでさ、」

紫「何かしら。」

霊夢「この大異変、どうみてるのよ。」

紫「うーん、やっぱり誰かが起こしたのだと思うわね。自然の崩壊だとしても既に60年に一度のやつは最近起こってるし。」

霊夢「難しいわ。今回の異変は。今までに無い異変だもん。聞いたこと無い聞いたこと無い。」

紫「ま、ゆつくりでも良いから確実に解決しなさい。私もあの2つの結界と境界張るのは手伝うから。」

霊夢「分かってるわよ。やれば良いんでしょ。」

紫「そうよ。」

幻想の全てを知る半獣

霊夢 「さてと、久しぶりに、小鈴ちゃん？」

小鈴 「はい。聞いてくださいよ霊夢さん！」

霊夢 「あら、どうしたかしら？」

小鈴 「新しい新聞が前来たんですよ。それでさらっと記事を読んだらこれ、見てくださいよ！」

霊夢 は小鈴に言われた『謎の天才教師現る。一部行動に批判か？』という見出しの記事を読んだ。

小鈴 「これ、寺子屋の『慧音』さんですよね!？」

霊夢 「そうね。ええと、『この教師は現在、『私立凰峰崎学園』にて3年生の歴史全般の教鞭をとっている』ねえ。」

小鈴 「どうするんですか？」

霊夢 「勿論行くわ。」

霊夢 は飛び出した。

魔理沙 「ちよつと待ってくれよ！」

遅れて魔理沙も飛び出した。

〜数分後〜

霊夢 「意外と近かったわ。」

魔理沙 「その『スマホ』だっけ？便利だよなあ。」

二人は飛んだまま、3年生の教室と思われる教室を窓から見たが、慧音は居なかった。

霊夢 「おつかしいわねえ。」

魔理沙 「あれじゃないか？今は休憩とか。」

霊夢 「そんなのがあるのかしら？」

その時、突然『キーンコーンカーンコーン』という奇妙な音が聞こえた。

霊夢 「今の何かしら？」

魔理沙 「これはあれじゃないか？授業が変わることを知らせる目印的な奴じゃないか？」

霊夢 「なる程ね。」

そして窓から見ていると『慧音』がやってきた。

霊夢「入るわよ！」

魔理沙「どうやってだ！」

霊夢「こうやるのよ。霊器『無慈悲なお祓い棒』」

霊夢は自身が持つ霊力をお祓い棒に込めて一枚の窓を殴った。当然割れた。

男子生徒「なんだなんだ!？」

女子生徒「あの人見たことある！」

生徒は騒ぎだした。

慧音「おっと、霊夢か。どうしたんだ窓なんか割って。」

霊夢「いや、入り口から入れなかったのよ。護衛が強すぎて。誰も居ないはずなのに入ろうとしたら大きい音が出たわ。」

慧音「なるほど。で、直接入るために割ったと。」

霊夢「弁償なら神社秘蔵のお酒を2本あげるわ。」

慧音「なる程ね。まあそれで良いだろう。」

霊夢「ありがと。それで本題だけど、あんたを幻想郷に帰しに来たわ。」

慧音「お願いしたい。」

魔理沙「決断早!？」

慧音「ただ、この生徒達はどうかやら素行が少し悪いらしい。それをどうにかしてくれないか？」

霊夢「なる程ねえ。あ、良いこと思い付いたわ！紫！」

紫「何よ。私は忙しいのよ？」

霊夢「あの閻魔連れてきて頂戴。」

紫「ちよつと待って頂戴ね。」

紫はスキマに入ってから暫くし戻ってきた。

紫「お待たせ。」

映姫「ほう、中々説教しがいがあります。」

慧音「なる程。」

霊夢「後は頼んだわ。」

映姫「任せなさい。」

慧音「それじゃあ、ちよつと待っててくれ。」

慧音が何処かへ行き、5分程で戻ってきた。

慧音「それじゃあ帰ろう。」

慧音はスキマを通じて帰った。霊夢達も飛び出した。

映姫「さてと、貴方達。覚悟はできてますね？」

番外編 楽園地獄の閻魔

映姫は霊夢達が帰った後、教壇に立った。

映姫「さて皆さん。まずは自己紹介します。私の名前は『四季映姫・ヤマザナドウ』です。『ヤマザナドウ』というのは閻魔の役職です。」

生徒1「え、閻魔大王なのですか?」

映姫「そうです。」

生徒2「女なのにな?」

映姫「そこ!職業に男女なんてありません。確かに多少得意不得意はありますが『女だから』や『男だから』等と言って決めつけてはなりません。;; おほん、続けます。私には『白黒はつきりつける程度の能力』があり、これは私の独自の基準でその人を有罪無罪かをはつきりさせる能力です。」

生徒3「『程度の能力』てどういうことですか?」

映姫「『程度の能力』というのは私が担当する『幻想郷』という場所での特技のようなものです。『慧音』であれば『歴史を隠す程度の能力』です。私はこの学校に1. 2週間程滞在し、行いの悪い者には私から言います。良いですね?」

生徒「はい。」

映姫「では、私はこれで。」

映姫は扉から教室を出て、少し聞き耳を立てた。

生徒1「あの先生ダルそうじゃね?」

生徒18「それな!」

映姫は呆れた。自分が出た瞬間、陰口大会が開かれたのだ。映姫は教室に入った。

映姫「はい皆さん。陰口とはどういうことですか?陰口をしても何にもならない。そう、あなたたちは少し毒を吐きすぎている。このままでは地獄へと落ちるだけです。一方的に閻魔から地獄行きを言い渡され、なにも抵抗できぬまま地獄へと落ちる。社会のために貢献し、勉強をすること。これが今の貴方達に積める善行よ。」

映姫は教室を出て、廊下を歩き出した。

（数分後）

映姫「ここね。職員室とやらは。」

映姫は職員室の扉を開けた。

教職員1「誰だお前は!？」

映姫「私は『四季映姫・ヤマザナドゥ』です。閻魔王として日々罪人を裁いてます。慧音に代わり臨時的に生徒指導としてこの学校に来ました。」

教職員2「慧音先生はどうしたのですか？」

映姫「故郷へと帰りました。ただいま故郷はある事件に巻き込まれてほぼ全住人はこの世界のどこかへと散らばりました。現在その故郷の巫女が事件を解決するため、住人を回収し回っています。」

教職員3「成る程。それで、貴方はどのぐらいの期間、本校に滞在するのですか？」

映姫「おおよそ1、2週間を考えてます。その間、生徒達の非行を見つけ次第、傾向、生徒指導をします。」

校長「話は聞きました。是非お願い致します。」

映姫「こちらこそよろしくお願いします。」

木天蓼と猫の総支配者

「霊夢が帰ってる途中、魔理沙が変な行動をしている猫を見つけた。」

魔理沙「なあ霊夢。あの猫見てみる。」

霊夢「はい？あの猫お？確かに様子が変ね。」

魔理沙「あと追おうぜ！」

2人は飛んで猫の所へ行った。

霊夢「これ、マタタビの感じがするわ。」

魔理沙「マタタビ？」

霊夢「操作されてる感じがするわ。追跡しましょう。」

二人は歩き始めた。

数十分後

猫はとある路地裏で曲がった。

霊夢「行くわよ。」

魔理沙「なんか出そうな雰囲気があるぜ。」

二人も曲がった。

霊夢「な、何よこれ、」

魔理沙「おいおい、やばくねえか？」

二人は驚いた。なにせ、猫がマタタビの製造をしているのだ。

霊夢「まさかこんなことになってたとは、」

一匹の三毛猫が来た。

霊夢「あ、あんた待ちなさい！」

霊夢が捕まえると、三毛猫は変身した。『商売繁盛の縁起物』こと

『豪徳寺ミケ』である。

ミケ「放しておくれよ！」

霊夢「駄目よ！さあ情報を吐きなさい！」

ミケ「わかつたから！まずここは、猫又が経営してる猫用のマタタビ製造所。マタタビをつかって猫を使役してるわ。とても式神とは思えない。」

霊夢「で、あんたは何でここに来たのよ。」

ミケ「そ、それはあ、ええと、お金を招き入れるためだよ。」

霊夢「本当かしら？」

ミケ「本当本当！それより経営者が来たよ。」

霊夢は後ろを振り返る。

橙「博麗神社の巫女さん、どうしたの？」

霊夢「あんたね？この経営者は？」

橙「そうよ。」

魔理沙「今の内に、」

魔理沙はスキマでミケを帰した。

霊夢「あんた、藍が心配してたわよ？」

橙「藍様が、でももう少して確立できるわ！マタタビによる猫の使役法が！」

霊夢「その前にあんたを退治してあげるわ！霊符『夢想封印』！」
ありがたい光が橙へと向かう。

橙「猫達！」

周りの猫達が橙を守るように光に当たっていった。

橙「今度はこつち！鬼神『飛翔毘沙門天』」

橙は回転しながら飛び回りその後を青とピンクの弾幕が放たれた。

霊夢「ふふふ、余裕よ。」

霊夢は難なく躲し、一定数、橙に被弾させた。そして、回転の影響で橙がダウンしているのを見計らい、霊夢がスキマで帰した。

霊夢「ふう、これで一件落着」

魔理沙「じゃないな。見てみるこの猫を。どうするんだ。」

スキマから橙が顔を出した。

橙「皆野良だからそのまま逃がして。」

霊夢「うわビックリした。」

紫「橙の帰還ありがとね〜！」

紫と橙はスキマに戻った。

霊夢「さて、皆、もう仕事は終わりよ。もう自由よ。」

働き者には休息を

二人が神社に帰ってきた。

霊夢「よし次行くわよ！」

魔理沙「なあ、少し休まないか？」

霊夢「まあそうね、確かに2日位解決のためにどっかに行きつぱなしだったしねえ、丁度日も暮れそうね。よし。今日は飲みましょ。」

スキマが開き、紫が顔を出す。

紫「あら、飲むの？」

霊夢「ええ！」

紫「まあ、最近働きつぱなしだしねえ。私も少しは休憩でもしようかしら。」

魔理沙「お前も飲むのか。」

紫「折角だから外の世界のお酒買ってくるわ。」

紫はスキマに入った。

霊夢「外の酒、ねえ。」

ION

紫は近くの大型のお店に来た。

紫「ええと、買うのは、『ウイスキー』と『ストロングワン』あと『焼酎』。あと飲めなかつたときのための『日本酒』ね。」

紫は買うものを決め、入店した。

紫「スキマを、よし。お酒は入ったわ。後はおつまみを、あつたあつた。」

紫はおつまみを100個ぐらいカートに入れてレジへと行った。

数分後

店員「ええ、129点で112653円になります。」

紫「丁度で。」

紫は財布に開けたスキマから金を取り出した。

店員「お預かりします、こちらレシートです。ご利用有り難うございました。」

紫はスキマで移動した。

く外の博麗神社く

スキマが開き、色々と出てきた。

霊夢「こんなに、」

紫「さ、始めましょう。外の世界での初小宴会。」

紫はウイスキーの蓋を開け、霊夢と魔理沙は缶を開き、飲んでみた。

霊魔「ん、美味しい！」

紫「あら、良かったわ。うーん、やっぱり三人つてのは寂しいわね。」

紫が指パッチンすると、周りの空気が集まり始めた。

??「やっぱりばれてたか。」

霊夢「て、萃香じゃない。居たのね。」

萃香「ああ。いつ驚かそうか見極めてたんだ。そしたら紫に戻されたよ。」

紫「さ、飲みましょ。」

萃香「ああ。」

萃香も一緒に飲み始めた。

萃香「ん？この味初めて味わう。これは何て言うんだ？」

紫「それは『ウイスキー』ね。」

萃香「外の世界の？」

紫「そうよ。」

萃香「外の世界のも旨いな。」

霊夢「確かに。」

紫「外の世界も色々と進化してるのよ。」

萃香「ふうん。」

萃香はウイスキーを丸々一本飲み干した。

萃香「おお、美味しいから飲み干しちゃった。」

紫「残念まだあるわよ。」

霊夢「私も飲んでみたいわ。」

魔理沙「私も私も。」

紫「わかったわかった。はいどうぞ。」

紫はコップを渡した。

霊夢「確かにこれは美味しい。」

魔理沙「確かにな。」

紫（ウイスキーってこんな絶賛されるのね。）

紫は少し学んだ。

生命を操作する元無機物

二人が本堂から出てきた。

霊夢「ううん、」

魔理沙「二日酔いか？」

霊夢「ええ。あんたが寝た後萃香に付き合わされてね。」

魔理沙「ああ、どんまい。」

霊夢「竹林のところ行つてくるから1人、これとかどうかしら？

『屋久島の植物巨大化！』とかね。」

魔理沙「わかった。」

出力70%のマスタースパークをエンジンにしながら箒に跨がり
高速で飛んだ。

霊夢「さてと、永遠亭に行こうかな。」

魔理沙「ええと霊夢から渡された地図によると、あと20秒かな
？」

〈20秒後〉

魔理沙は屋久島に着いた。

魔理沙「ここが屋久島か。確かに所々でかくなってるな。それに魔
力がみなぎってる。こんなことが出来るやつは、」

??「あれ？魔理沙？」

後ろから声をかけられた。

魔理沙「お前だ。成美。」

成美「なんの話？」

魔理沙「この植物巨大化現象のことだ。」

成美「ああ！これ？これ私が魔法の練習としてちよつとだけつ
かったのよ。」

魔理沙「これがちよつととか？こりやまあまあだろう。ほら幻想郷
に帰すぞ。」

成美「ああそう？でもちよつと待って。もう少し試したい。」

そういつて成美は石に生命を与え、魔理沙に攻撃させた。

魔理沙「お、やる気か？やる気ならやってやんよ！恋符『マスター

スパーク!」

魔理沙は植物を傷つけないように成美にマスタースパークを放った。すこしかすった。

成美「私だって、地蔵『業火救済』」

魔理沙「おいおい待て。こんなところで炎弾幕は不味い!」

魔理沙は周りの水を弾幕にかけた。

成美「狡くない?」

魔理沙「お前は自然を消す気か!」

魔理沙はなんとか消化しきった。

成美「今度こそ!地蔵「活きの良いバレットゴーレム」」

大きめの弾幕に成美は生命を宿させ、小さい弾幕を出し続けた。

魔理沙「うお!細か!さっさと帰らせよう。」

魔理沙はなんとか近づき、そしてスキマを通らせた。

魔理沙「ふう。帰宅完了。と、その前に、」

魔理沙は魔力を抜き、植物を元の大きさに戻した。

魔理沙「これでよし。」

魔理沙は再び箒に跨がり高速で飛んだ。

〜3分後〜

魔理沙「行ってきたぜ。てまだ霊夢はいないか。」

霊夢「私もいま帰ったわ。で、誰だった?」

魔理沙「成美だ。」

霊夢「ああ、あの魔法地蔵?」

魔理沙「そうそう。魔法の練習でああしたらしい。私が魔力抜いて

元の大きさにしたけど。もう二日酔いは大丈夫なのか?」

霊夢「ええ。まあ。あそこ二日酔いの客も来るのか対応が速かった

わ。」

魔理沙「お前が二日酔いでよく行ってるからじゃないか?」

三獣大戦

くロシア カムチャツカ半島く

緑多いこの地で、一匹の黒馬が大量のオオワシを連れて、とある地へと向かっていた。

早鬼「元幻想郷に進め！」

早鬼はその脚力で走り抜き、オオワシ達は組長に着いて行くために必死に羽ばたき続けた。

く日本 北海道く

一匹の子羊が自分の部下の子孫を探していた。しかし、子孫は見つからなかった。

尤魔「ふむ、見つからない。もしかして全子孫は死んでしまったのではないか？まあ良い。私の身一つでやってやろうじゃないか。クツクツク。」

尤魔は近くにいた黒鳥、カラスを吸収し、その飛翔能力と賢さを手に入れ、狡猾な性格になった。

くノースサファリサツポロく

日本一危険とされる動物園にて一匹の龍が多くの危険動物達の逆らう気力を無くしていき、服従させていた。

八千慧（恐らくこの日本にカワウソはいない。だから鬼傑組の皆さんには申し訳ありませんが、戦力を補強しなければなりません。）

そうして、八千慧は動物達を従え、幻想郷があった地へと向かった。

く博麗神社く

霊夢が永遠亭から帰ってきたとき、遠くから地響きが聞こえてきた。

霊夢「な、何よこれ。」

魔理沙「さあな。ただ言えるのは、こっちに向かってくるってことだ。」

藪から虎が出てきた。

霊夢「出たあ！」

後から八千慧も出てきた。それに続くように早鬼と尤魔も来た。

霊夢「厄介だわあ！」

魔理沙「だけどチャンスでもあるぜ？」

霊夢「そうだけどさ。」

早鬼「お、この前の人間じゃないか。危ないから下がってな。」

八千慧「参加しても良いですけど。」

尤魔「ま、死ぬだけだが。」

霊夢達はそれぞれの武器を構えた。

尤魔「そう来なくちやなあ。」

戦闘が始まった。八千慧は動物達に、早鬼は脚力で、尤魔は先割れスプーンで攻撃し始めた。

霊夢「まずいわね。スキマで帰す隙がないわ。」

激しさが増す。

魔理沙「恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙はスペルカードを放った。

早鬼「おっと、危ない。」

八千慧「中々やりますね。」

霊夢「こつちも攻撃すれば隙が生まれる！ 霊符『夢想封印 散』」

霊夢も放つ。隙が生まれる。

霊夢「今！」

早鬼と八千慧をスキマで帰した。

尤魔「なる程なあ。そえやって地獄に帰すのか。」

霊夢「あんたも帰る？」

尤魔「ああ。」

霊夢「じゃあスキマに「その前に。」」

尤魔「あんたと一戦交えようじゃないか！」

尤魔は霊夢に襲いかかった。

霊夢「な、何て力よ。」

尤魔「道中で熊を吸収した。」

霊夢は押された。その時後ろから魔理沙が帰還用スキマを受け取り、尤魔を帰した。

霊夢「危なかつたわあ。」

魔理沙「感謝しな。」

霊夢「ありがと。」

紫が突然スキマから現れた。

紫「あ、その動物達、スキマで帰しといて。」

紫は消えた。

霊夢「はいはい。」

帰還用スキマで動物を帰し始めた。

魔理沙「お、小鈴、ここで怯えてたんだな。」

小鈴はその間、怯えて震えていた。

地の底の館

小鈴が怯え終わった時。

小鈴「霊夢さん！これ！」

小鈴は新聞記事を見せた。

小鈴『『全国で墓荒らしの被害拡大中。犯人目的は？』ですって！』

霊夢「お、次はそいつにしましよ。魔理沙。」

魔理沙「おお！」

二人は飛び去った。

小鈴「墓荒らし；；、何でそんなことを；；、」

魔理沙「何処に向かうんだ？」

霊夢「うーんそうね；；、こつちに日本最大の霊園が有るらしいわ。

行ってみましょう。」

二人は方向を変え、霊園へと向かった。

（静岡県）

霊夢「ここが調べたところ日本最大の霊園らしいわ。」

魔理沙「あそこにいるぞ。流石霊夢の勘だな。」

二人は対象に向かい、辿り着いた。

霊夢「観念しなさい！お燐！」

燐「げ、博麗のみこ；；、」

霊夢はお燐の胸倉を掴んだ。

霊夢「さあ吐きなさい。あんたの住み処を！」

燐「教えるから離しておくれ！」

霊夢は手を離れた。

燐「それにしても外の世界は良いね。死体が一斉管理されてて。持

ち去り甲斐がある。」

霊夢「ほら、さっさと案内しなさい。」

燐「分かりましたよーだ。」

お燐は猫車を押しながら、霊夢達を案内し始めた。

（4時間後）

霊夢「遠いわねえ。」

燐「でも、着いたよ。ここだよ。」

地底の灼熱地獄跡に建っていた館。地霊殿。

霊夢「さ、取り敢えずあんたの主人に殴り込みに行きましょう。」

霊夢は扉を開けた。すると、主は扉の前で待っていた。

さとり「ようこそ地霊殿へ。帰しに来たんですよ。大丈夫です。

こいしはこの中にいます。ただ一つ問題がありまして、それがペットのお空がいらないですよ。おや、前にも紅魔館を帰すときにあつたんですか。しかもフランが。大変でしたね。取り敢えず、地霊殿は帰してもらって構いません。とりかくお空の捜索、お願いしますね。」

さとりは心を読んで一人会話をした。

霊夢「相変わらずね。」

霊夢は空を飛び、スキマで地霊殿と共にさとり、こいし、お燐を帰した。

霊夢「さて、あの鳥がないのね。」

魔理沙「かなり厄介じゃないか？最悪地上を侵攻することも考えられる。それに捕まってもまずい。」

霊夢「そうね。捜索を急ぎましょう。」

二人は外の博麗神社に急いで飛び向かった。

〈数分後〉

霊夢「小鈴ちゃん！鳥に関する記事あるかしら!？」

小鈴「え!?!どうしたんですかそんな急いで;;、これとかどうでしょう。四日前の記事ですが、『アメリカカルフォルニア州で驚異的猛暑。それと同時に発見された翼を持った人の正体は?』」

写真には黒い翼を広げた人のようなもの、お空が左腕を挙げ、人差し指と親指のみを伸ばした状態で写っていた。霊夢と魔理沙はそれを見るや否や、高速で飛んだ。

地上に出た地底の太陽

くカルフォルニア州上空く@空視点 前日

ここは地底に比べて寒い。寒すぎる。そうだ！私が本物の暑さを教えて上げよう！

空「さあ、見せてやろう！八咫鳥の核融合の力でここを灼熱地獄のようにさせてやる！」

地獄鳥は大声で叫び、実行した。

そして現在

霊夢と魔理沙は急いで『カリフォルニア州』に向かっていた。

魔理沙「だよ霊夢、『猛暑』て物凄く暑いことか？」

霊夢「そうじゃない？幻想郷は夏は暑いけどそれ以外はそんなに暑くないからねえ。」

魔理沙「見えてきたぞ。来るのは2回目か？」

霊夢「そうね。」

二人は再びアメリカに辿り着いた。

魔理沙「それにしてもここでも暑くないか？」

霊夢「そうね。きつとあそこにいるやつのせいでしょ。」

霊夢は上空で右手の先に小型の光輝く、眩しい球体、人工太陽を造り出している馬k；；、地獄鳥を指差した。

霊夢「あれ以上悪さされたらたまったもんじゃないわ。」

魔理沙「ま、捕まっていただけかもしれませんがな。」

霊夢「何でよ。」

魔理沙「だってあいつ、誘拐されそうじゃないか。誘拐されてたら核融合を利用して発見が困難になってたぞ。」

霊夢「それもそうね。」

そんな会話をし、二人は飛ぶスピードを上げた。現在の気温は52℃程。常人では耐えられないが、二人はかつて地底の灼熱地獄跡でそのような温度を体験したので大丈夫だった。

霊夢「着いたわ！」

空「あれ？お前らは、剛欲異聞あの時の不純物！また来たのか！今度こそ

燃やし尽くしてやる！」

魔理沙「だから違うかな！」

霊夢「魔理沙、無駄よ。だってあいつは」

魔理沙「鳥か。」

魔理沙は何かを理解した。

空「爆符『ペタフレア』！」

お空はスペルカードを宣言した。何処からともなく警告音が鳴り響き、巨大な恒星のような赤弾幕をいくつも放ち、それらは時期に小さくなっていた。それと同時に細かい青弾幕も放たれていた。

霊夢「なかなかきついやつを！」

魔理沙「暑！」

二人は温度と密度に苦戦していた。

空「まだまだ！『サブタレイn』止めなさい！」

突然仲裁の声が入った。声の元を見るとスキマからさとりが上半身だけを出していた。

空「さ、さとり様！」

さとり「お空、もう止めなさい！そして帰ってきて。」

空「分かりました！」

霊夢はスキマをお空に使い、地霊殿に帰した。

さとり「ありがとうございます。」

さとりはスキマの中に戻り、スキマは閉じた。

霊夢「危なかったわ〜！」

その下では人々が歓声を上げていた。

アメリカ人「oh!hero！」

しかし、中には倒れている人もいたが、救急車に運ばれていった。

霊夢達は念のためアメリカ中を飛び回り、幻想郷+αの住人が居ないかを探した。

霊夢「いないわねえ。」

魔理沙「なあ、大丈夫なんじゃないか？」

霊夢「だってここには前にあの貌がいたのよ。まだ絶対に居るわ。」

魔理沙「ま、付き合つてやるよ。それにしても暑いな。」

霊夢「あんたあれ持つてないの？『アイスフェアリー』。」

魔理沙「ああ。これか？」

魔理沙はスカートの内側から氷精の絵が描かれたカードを取り出した。

霊夢「それぞれ。発動して。」

魔理沙がカードを振ると、周りに氷の礫が現れた。

霊夢「ふう、これで火照った体も少し冷めるわ。」

「そうねー。」

魔理沙「そうだな、って！何混ざってんだ！地獄の女神！」

へカーティア（赤）「あら、少しは良いじゃないの。」

へカーティア（青）「ねえ。」

霊夢「どうかあんたも来てたのね、」

へカーティア（赤青）「いやさつき来たばっか。だってクラウンピースが楽しそうに帰ってきてきてるいんだもん！」

魔理沙「綺麗にハモったな。さすが自分同士だ。」

へカーティアは満足そうな顔を見せた。

へカーティア（赤）「それでね、私もクラウンピースがやったみたい遊びたいんだけど、私が遊ぶとき、ここら辺が塵になっちゃうと思うの。だから私は観戦する。」

霊夢「もしかして、」

へカーティア（赤青）「クラウンピース〜？」

へカーティアが呼ぶと、すぐにクラウンピースが現れた。

クラウンピース「イツツ、ルナティックタイム！」

ヘカーティア（赤）「命令よ。もう一回楽しんでやって！」
クラウンピース「分かりました！」

クラウンピースと魔理沙らは戦闘体制に入った。

クラウンピース『アポロ捏造説』！』

3つの月現れ、回転し始め、その月が紫の炎形弾を放ち始めた。

霊夢「いきなりこれね、；、；」

魔理沙「なんとも嫌らしいスペルからやるぜ。」

霊夢達は苦戦しながらも避け続け、規定時間避け続けた。

クラウンピース「次！月夢『エクリプスナイトメア！』』

一つの月が円を描くように回り始め、クラウンピースは五芒星の形のように赤い弾幕を高速で放ち始めた。

霊夢「なによこれ。見たことないわ。」

クラウンピース「これは夢の中で放ったんだもん！」

霊夢達はこれも避けていた。

ヘカーティア（赤）「オツケークラウンピース。じゃあ私も参加しちゃおう！大丈夫よ！手加減するから。『トリニタリアンラプソディー』！」

青い三角形の何かが落ちてきて、そこを中心に円状に弾幕が出てきた。これには二人も耐えられずに当たってしまった。

ヘカーティア（赤）「ふふふ、私たちの勝ち。じゃ、私はこれで。」

ヘカーティア（赤）は自力で帰っていった。

ヘカーティア（青）「じゃ、私も。」

ヘカーティア（青）は何処かへと飛んでいった。

霊夢「油断したわあ。」

霊夢は魔理沙と自分をスキマに通し、幻想郷へ一回帰った。

敗北帰還

博麗神社で霊夢は少し休んでいた。

紫「霊夢が負けるなんてね。まあ珍しい。」

紫は霊夢の現状を見て呟いた。

幽々子「へへ。珍しい。霊夢って負け無しのイメージだったのに。」
幽々子も来た。

紫「ま、ちよつと気付く薬でも投与しようかしらね。」

紫は小さめのスキマを霊夢の口の上に開き、薬を呑み込ませた。すると、霊夢は目を覚ました。

霊夢「は！私は、；、；」

紫「どうしたのよ霊夢。貴方らしくない。」

霊夢「女神と地獄の妖精に共同スペカされた。」

紫「あらあら。」

霊夢「で、あんたここに居て良いの？大結界は？」

紫「張り直し終わったわよ。後は住人を戻すだけ。」

霊夢「分かった。」

紫「じゃあ、行ってらっしゃい！」

紫は霊夢をスキマを通し、何処かへと送った。

く何処かく

霊夢「えーと、ここは、；、；」

霊夢は下を見た。

霊夢「妖怪の山？」

何かが飛び上がってくる。

文「あ、霊夢さん！丁度良かった！妖怪の山を幻想郷に戻してくださいー！」

霊夢「えらく素直ね。」

文「不便なんですよ！」

???「マジで不便。」

霊夢「いつの間に来たのよ。神奈子。」

神奈子「久しぶりの外。観光も良いんだが、信仰があるか怖い。だ

から早く戻してくれないか。」

霊夢「勿論よ。」

霊夢は妖怪の山を覆うような大きさのスキマに変更し、妖怪の山を全て通し、幻想郷へと戻した。

神奈子「有り難う。」

二妖神もスキマを通った。

霊夢「さてと、頑張らないと。」

何かが降ってきた。

霊夢「何これ？アビリティカード？初めて見るカードだわ。」

空からスキマから二本の尻尾がでてる絵が描かれたカードが降ってきた。霊夢は効果を見た。

霊夢『八雲式迷子捜索法』『迷子をすぐ見つける八雲紫の能力 迷子の迷子の子猫ちゃん 貴方のところへすぐ行くよ。』紫が落としたのね。たまには気が利くじゃない。」

霊夢はカードを使ってみた。

く博麗神社く

霊夢「て、ここ神社じゃない。；；、そういうことね。」

霊夢は小鈴を通した。

霊夢「ごめんね。」

もう一回使った。また博麗神社に来た。

霊夢「今度は、；、ああ。」

霊夢は近くにいたあうんを通した。そして、もう一度使うと、今度は別の場所に来た。

く金閣寺く

目の前には金色の寺院がたっていた。そして、池には天の邪鬼が。

正邪「ん？博麗の巫女か。いつの間に。まあ良い。まだ外をたの

s

霊夢は正邪を通して帰した。

霊夢「便利ねこれ。」

霊夢はもう一度使用した。

く東深見高校く

霊夢が来た瞬間、絶叫が聞こえた。女子高生のものでない、小さな絶叫が。

霊夢「あ、針妙丸。」

針妙丸「助けてー！」

霊夢はスキマに通した。

そして…

そうして、霊夢はカードを酷使し、後一人のところまできた。しかし、後一人というところでカードが何故か使えなくなった。

紫「あらあら、お困りのようね。」

霊夢「そうなのよねえ。やつとここまで来たのに…」

紫「たしか後一人は…」

霊夢「千亦よ。」

紫「あの商売神？ま、スキマで探してみるわ。」

紫はスキマに入っていった。そのとき、

魔理沙「あ、いたいた。よ、霊夢。」

霊夢「あら、魔理沙。どうしたのよ。」

魔理沙「おまえ、聞いたぞ。後一人なんだな。」

霊夢「ええ。大変だったわ。」

二人が談話していると紫が現れた。

紫「見つけたけどやる？」

霊夢「ええ。最後の一人だからね。連れてってちょうだい。」

紫は霊夢と魔理沙をスキマで移動させた。

く世界の大企業が集う場所 ニューヨーク証券取引所く

二人は数々のビルなどが立ち並ぶ場所の上空に現れた。空には月が昇り、虹が架かっている。今宵も市場に商品が並ぶ。目の前に立ち尽くす市場の神、『天弓千亦』は語る。

千亦「ようこそ月虹市場へ。貴女方の入場お待ちしていました。結果を破壊して申し訳ございませんでした。」

霊夢「ふーん、あんたがねえ。」

千亦「ここは一つ、スペルカード戦でもどうです？」

霊夢「ま、あんたを懲らしめるには良いわね。やってやろうじやないの。」

魔理沙「私もやってやる！」

三人は戦闘態勢へと入った。

千亦『『無主への供物』』

二人の周りに中心角300度程の扇形の弧になるようにお札が現れ、二人に向かつてきたが二人は難なく避けた。

千亦「ふふふ、流石に一度見たものは避けなれてるな。『弾幕狂蒐家の妄執』」

円が一度縮み、その後大きくなり、二人の後ろから米形弾がばらまかれたが、難なくまた避けた。

千亦「『弾幕自由市場』」

二つの円が現れては崩れ、霊夢達に向かつていった。少し苦戦したが何とか避けきった。

千亦「『虹人環』」

色とりどりの弾幕が回るように放たれた。二人はこれには苦戦しなかった。

千亦「『無道のバレットドミニオン』」

色とりどりの弾幕が今度は花を描くように放たれるが二人はこれも避けきった。

千亦「流石は英雄の二人ですね。『弾幕のアジュール』」

色とりどりの弾幕が今度は円状に放たれ、小さい弾幕が二人に近づくとナイフへと変わった。そしてしばらくして今度はクナイが縦一直線になって飛んできて、こちらも近づくとナイフへと変わった。そして最後には横一直線も追加され、ナイフが凄く多くなった。二人は一回ずつピチユツたが何とか避けきった。

千亦「これで最後よ。『闇市場のミシガンロール』」

色彩豊かな弾幕が幾何学的な模様を描き飛んでくる。

霊夢「何これ見たこと無いわね。」

二人はそう思いつつ、苦戦しながらも避けきった。

千亦「お見事ですね。降参です。この異変の真相を語りましょう。」

真相

千亦は語り出した。

千亦「私はアビリティカードが最近陳腐化してるのです。それに対応するためにカードの強化を図りました。」

霊夢「で？」

千亦「それで：フランドールのカードの調節を誤ってしまってその結果：」

魔理沙「そんなしょうもない事でこんな事になったのかよ！」

千亦「申し訳ありません。何でお詫びしたのか：」

霊夢「はあ：ま、良いわ。それより、来るわよ。」

下に沢山の人が居た。

霊夢「野次入れとマスコミよ。あんた力をとんぐらい使った？」

千亦「えーとどんぐらいだったかしら：」

霊夢「滅茶苦茶使った影響で所有者のいない物も増えてるわ。」

へりコプターが近づいてきた。

キヤスター「あなた方は一体何者何ですか!？」

霊夢「：ね？うざいわよね？かみ返したくなるわ。」

千亦「やる？」

霊夢「良いわよ。：：とりたいところだけど、辞めておきましょう。ま、逃げましょ。」

三人はスキマで逃げた。

く博麗神社く

霊夢達は幻想郷の神社に着いた。

紫「あらお帰りなさい。これで異変は解決ね。」

紫がそういうと霊夢は言った。

霊夢「いや、まだよ。」

すると、霊夢の後ろから霊夢達が来たスキマを通じて、マスコミが来た。

魔理沙「くそ！スキマが閉まるのをおさえやがったな！」

霊夢は御札を準備した。

紫「ふーん、ま、良いわ。少し観光させてあげましょ。」

霊夢は御札を渋々しまった。

マスコミ「ここは何処ですか!？」

紫「ここは幻想郷。妖怪の楽園です。ここでは人間は餌ですのでお気を付けて。」

マスコミ達は怖がり逃げようとしたが、紫がスキマを閉じた。

紫「餌を逃すとも?」

紫はスキマをマスコミの足元に開き、落とした。

紫「まもなく、無縁塚に到着します。お出口は下側です。」

紫は鑑賞するためにスキマを開いた。マスコミは人骨に驚いたり妖怪に恐怖したりしていた。

紫「ふふふ、いい反応ね。」

霊夢「これでこいつらも懲りるかしら。」

紫「懲りると思うわよ。だって恐怖体験トラウマを植え付けたもの。」

霊夢「そうよね。」

二人は笑った。

魔理沙「…えげつねえな。やる事が。」

千亦「そうですね。私もこんな事やりません。」

もう二人はとも引いていた。

紫「はあ、面白い。やっぱ外の世界の人は面白いわあ。」

霊夢「まあそろそろ帰しましょ。」

紫「ま、それもそうね。」

紫はまた足元にスキマを開き、マスコミ達を帰した。ついでにカメラのデータから幻想郷に関する記録を消した。

霊夢「ま、これで異変は解決ね。」

最終回

ようやく訪れた平和

霊夢と魔理沙は縁側でお茶を啜っていた。

霊夢「平和ねえ。」

魔理沙「そうだな。これを見てまさか昨日1, 2週間前までは土地とか住人が行方不明になってたとは思えないよな。」

二人は解決した異変について語っていた。

霊夢「ま、そうね。そういや、あの商売の神は何してんのよ?」

魔理沙「あいつか? あいつは今異変に巻き込んだ謝罪の品としてカードを配^{らされてる}ってるらしいぞ。」

霊夢「ま、そうよね。」

二人が雑談しているとスキマが開き、天弓千亦が現れた。

千亦「先日は申し訳ございませんでした。特に御二方へは多大なる迷惑をかけました。これはその謝罪の品です。」

千亦は二人に『不死鳥の尾』を渡した。

霊夢「このカードの流通を増やしているの?」

千亦「ご心配なく、他の方には別のカードを渡してるので。」

千亦はスキマに入り、何処かへと去った。

霊夢「ふーん、これをねえ。」

魔理沙「まあ私はもう集めてるけどな。」

霊夢「ふーん、ま、私も既に一枚持つてるけどね。」

霊夢は戸棚にカードを仕舞い、魔理沙は帽子に仕舞った。

霊夢「そういえばさ、この『スマホ』でどうするのかしら。」

魔理沙「あ、確かに、私もまだ持つてるぜ。」

またスキマが開き、今度は紫があらわれた。

紫「あら、私としたことにその回収を忘れてたわ。まあ持つてても幻想郷では使えないし、そもそも使う場面が無いのよね。ま、回収しちゃうわ。」

霊夢と魔理沙は紫にスマホを渡した。

紫「あ、そうそう。霊夢、大結界張るから手伝って頂戴。」

紫がそう言うと、大勢の多種多様な妖怪が集まってきた。

霊夢「はあ、龍神に許しを乞うのよね？分かったわよ。やればいいんでしょ？」

霊夢はお祓い棒を持ち、左右に振りながら呪文を唱え始めた。それと共に妖怪達は祈りを捧げた。

く数分後く

霊夢「よし、張れたわ。」

博麗大結界が再展開され、妖怪達は感謝を述べ、去った。

魔理沙「……あ！」

霊夢「どうしたのよ。」

魔理沙「映姫どうする!？」

紫「大丈夫よ。もう既に帰してあるわ。」

魔理沙「はあどきどきする。」

紫はスキマに入り、何処かへと去った。その時入れ替わるように阿求が来た。

阿求「霊夢さんた魔理沙さんこんにちは。」

霊夢「あら、どうしたのよ。まあ、あの異変のことでしょうけど。」

阿求「そうですね。今日はその異変の事について聞きに来ました。」

魔理沙「良いぜ。答えてやる。」

こうして、『幻想郷縁起』には新たに『分散異変』の事の顛末の事について書かれた。

幻想郷にはそれを取り巻く二つの結界、博麗大結界と幻と実体の境界がある。博麗大結界は常識と非常識を隔て、妖怪を守り、幻と実体の境界は外の世界で忘れ去られた、否定されたものを幻想郷に入りやすくし幻想郷を成り立たせる役目がある。そして、その結界は異変を終え、新しい結界に張り替えられ、これからも幻想郷を守っていくだろう。

）
終
）